

中村素堂

二

この八メートルほどの長いテーブルに紋付羽織、袴の先生方が、多い時は四、五人、たまにお二人くらいの時もあるが、大勢の観客の注目の中で軽快に書いて見せる。半切や額、色紙、短冊、扇子まで何でも一点につきいくらと定めてあるご揮毫料を受付へ差し出して、当日ご出席の先生の中から希望のお名前をつけて申し込んでおくと即席か一、二時間のうちには書いていただけるし、今お願いしたのを目の前で書いていただける時など、とてもうれしくて肝心の展覧会よりその方に気をとられて、展覧会は一時間、席上揮毫は三時間、それも立ちっぱなしでの見物で足が棒のようになったりした。

あの折り山のある扇子に書く手つき、仮名の散らし書き、条幅の配字のみごさ、自分のお願したものもは一点きりだが、各流各派のその時代の著名な先生方のそれぞれ違った書風や印の捺し方、筆硯、用具の凝り方まで何から何まで、大した興味をひかれたことは、今日こんな爺さんになっても計り知れないくらい役にたつことを知ることができた。

私の恩師の霞洞先生は、どちらかという少し遅筆の方で、謹厳に黙々と書いておられるのに、今の柳田泰雲先生の父君の泰麓先生などは、片手であごひげをいじりながら片手で筆の頭の方をつまむように持ち、吊した筆の先で書くように、冗談をまじえながら書いて、何とも速かにご自分の頼まれたものはさっさと書きおえて休息しておられる。

花房雲山先生、豊道春海先生、川村驥山先生などは大体柳田先生に似た速さで、たまに間違つて書いたものを、うまく補つておもしろい別の作品になったりして観ている人々を笑わせておられる。

霞洞先生がひとりお忙しいのが何となくお気の毒で、墨が足りなかつたりすると自分から進んで墨を磨つてあげたりする。どうも自分の先生のものだけを磨つてあげても何となく気が引けて、ついお隣りの席の先生にもおべつかを使つて硯一ぱい磨つてあげたりすると、手の空くのを待つてその隣りの方からも磨つてもらいたいとご注文も出るようになったりして、佇つて見ているのと違つた疲労がプラスされて、館内がほの暗くなつて閉館になる時分にはへとへとになつたこともある。

貝原益軒先生のご子孫であられるという貝原遜軒先生は大分お身丈も低く、小柄な方だつたのと、ご高齢でもあつて、かきものあと後方にある休憩席で休みながら塩煎餅でお茶を喫んでおられた。ある時先生方もお帰りになられるころ、お忘れ物などあるかとひと通りその附近を見廻つてみると、雅箋紙の片で丁寧に包んであるものを見つけふと開けて見ると、貝原先生が大体煎餅の味のある部分をしゃぶつてから、捨てられるつもりで包んでおかれたのだと判つた。あとの人がまた不審がらぬようにと私はわざと聞いて中味が見えるようにしておいた。

全館にひとりか二人くらいしかない小使さんのような人が箆を持つてきて、さて掃除のついでにと椅子に掛けて土瓶の残りの茶をつぎ、その貝原先生しゃぶり乾きかけた煎餅をきれいに食べてしまつた。私には何の責任もないように思うけれど、何だか気の毒なことをしたような思い出となつてゐる。

この席上揮毫は「墨場必携」という書きもの用の名句の手控えの使ひ方、印を捺すための定規「印矩」というもの、軽く携帯に便利である木印の存在、揮毫の際の位置のとおり方、作品による墨の濃淡など随分いろんなことを知り、自分には書けもしない癖に道具類は凝つたものをほしがつたりして、何となく文人風なものに興味を持ち、マセた若ぞうが出来あがつたようだ。(つづく)